

博物館運営多難

関西大学社会安全研究センター 小澤 守

昨今、博物館の収集物を収納しておくスペースが不足しているという。先ごろの報道によれば、文化庁から、「博物館の設置及び運営上の望ましい基準」を見直し、一定の条件のもとにデジタルなどの記録媒体に残したのち、廃棄もやむを得ないとの方針が出されたそう。もちろん展示のスペースも限りがあるし、また十分に管理された展示館や倉庫にも限界があるからとのことである。

数年前に筑波にある科学博物館の倉庫を見学する機会があった。そこには非常に多くの収蔵物がいわば所狭しと置かれていたのを見てびっくりした。企業や大学などでは保存できないが、しかし我が国における科学技術の展開を知る上で重要と思しきものは積極的に受け入れてきたという。にもかかわらず、膨大な資料、収蔵物の整理の要員も不足し、予算さえも削減されているという現状はいかがなものか。要員確保すべく公募しても全く集まらないという。博物館で収蔵品に囲まれて資料整理するより、企業で研究開発や設計、製造に関わる方が魅力的と思われているのだろう。それならいつそ企業で長年にわたって研究開発や設計に携わってきた人たちの再就職の場としてはどうかとも思うが、それもなかなか難しいようである。

幕末に欧米列強に大きな刺激をもらい、科学技術導入に邁進してきて百数十年、先人たちの努力の結晶とも言えるべき多種多様な機器が床や物品棚に眠っているばかりで、青少年や工学を志す学生諸子の目に触れないという状況。いや、そんな古臭い遺物などはどうでもいいという意見もあるだろうが、書物に書かれた文字としての科学技術史よりも現物に触れることの方がどれほど貴重な体験になるかと思うと心が痛む。

我が国で建造してきた船舶など大きなものは特別の場合を除き保存が難しいが、建屋内に収蔵できるものはしっかりした調査研究ののちに一般に公開されるのが望ましいのは間違いない。最近聞いた話で、山犬のはく製を明治以来大事に保存してきたところ、詳細に調べてみると山犬ではなく日本狼であったとか。人工物の場合にはそのようなことは少ないのかもしれないが、後の分析によって新たな発見もありうるということだ。どこかの博物館では収蔵物の倉庫を改修して詳細な分析ができていないものもひっくりめて棚に並べて一般に公開しているという。そのあいた空間ではセミナーとか様々な催しができるようになっていとも聞く。行政側からすれば、そのような催しの開催などを通じて客を増やし、収入を増やし、自活の道を探れとのことだろうが、ロンドンのBritish MuseumやScience Museumなどは確か入場料は無料だったと思う。もちろん彼の地でも財政上の問題がないわけではないだろうが、少なくとも近代科学技術を世界的に牽引してきたある種の自負を感じざるをえない。

科学技術立国などと自称している我が国は、先述のように、もとはといえば欧米から導入された科学技術を先人たちが長年かけて創意工夫をこらし、我がものにしてきた歴史のう

えに立脚している。旧ソ連時代、モスクワの研究所のメンバーが筆者の所属する研究室にしばらく滞在したことがあった。中之島公会堂を案内したとき、彼はこんなものヨーロッパのイミテーションだからさっさと建て替えたほうがいいと言った。ある一面それも正当ではあろうが、我が国の技術発展の歴史を振り返った時、やはり中之島公会堂は貴重な建築物である。現在の梅田の高層ビルはそのような歴史があってこそ出来上がっているわけなのだから。

国内にある鉄道や工作機械、自動車、織機など専門的な博物館や資料館の多くは企業による施設である。収蔵物の多くは動態保存、あるいは稼働するように修復した状態で保存されていて実に楽しい。その一方で、日本を代表する科博の倉庫の実態は、政治セクターにおける我が国の科学技術に対する思想の貧困さの表れかもしれない。博物館は如何にあるべきか検討すること、そしてどうにかして筑波の倉庫を現状のままでもいいから一般公開すること、それらこそ科学技術立国をうたう前に踏み出すべき一歩ではないのだろうか。



東京両国通運会社川蒸気往復盛栄真景之図